

## クリスマスと音楽

竹内智子(声楽・キリスト教音楽専攻  
恵泉女学園大学非常勤講師)

### ○羊飼いの驚き

「すると突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。『いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。』」(ルカによる福音書 2 章 13~14 節)

新約聖書に登場する最初の音楽(合唱)の記述です。「グローリア インエクセルシスデーオ~」。このテキストは多くの名曲を生み出しました。例えばルターのコラール(:民衆の賛美歌)「天の彼方から」は、天使と子どもの対話の形で上拍のリズムを用いて生き生きと喜びを伝え、バッハの「クリスマス・オラトリオ」第 2 日目のカンタータでは、壮大なシンフォニアに続く叙唱とコラールが、この場面を忠実に再現しています。天使を前にした羊飼いの驚きと、未知のものを受け入れる謙虚さは、受胎告知を受けたマリアにも重なります。そしてマリアは神をあがめました(マニフィカート:マリアの賛歌)。この場面から、多くの「マニフィカート」(ガブリエリ、シュッツ、バッハなど)や「アヴェマリア」が生まれます。特に後者からは、グレゴリオ聖歌始めシューベルト(エレンの歌)、グノー、ヴェルディなどによる名作が結実しました。ちなみにグレゴリオ聖歌とは、西洋音楽の源泉でありながら、古代の詩編唱の旋律を秘める単旋律の素朴な聖歌ですが、その豊かな響きは宗教音楽本来の霊性( Pneuma )を感じさせます。

イエスが普通の女性マリアから生まれ、その誕生を当時最も蔑まれていた羊飼いに知らされたという物語は、イエスが小さき者、貧しき者の中に生まれ、彼らに希望と救いをもたらす「闇の中の光」となるというメッセージを示唆しています。それはやがて宇宙的視野をもって世界に伝播しました。今や世界中の人々が宗教の壁を越えて祝うクリスマスが、サンタクロースも貢献してチャリティーや不戦の精神を育んできた、その不思議な力の源となるメッセージです。

### ○クリスマス・キャロル

賛美歌、特にクリスマス・キャロルの多くは、庶民が歌い継いできた

民謡にルーツがあります。宗教的民謡は、初め教会と反目しますが、宗教改革を背景に徐々に浸透していきました。キャロルとは「踊り」の意で、元来踊りを伴うバラッドを指しました。クリスマスの賛美歌に集約されるのは16世紀からです。また民衆詩バラッドには宗教詩も多く、聖俗の境界があいまいだったのです。音楽的には、「ひいらぎ飾ろう」のように、ダンスのリズムを持つ明るい曲が主流です。またブリテンの合唱曲「キャロルの祭典」は、中世や北欧神話由来のテキストを含み、異文化を受容してきたクリスマスの多彩な魅力にあふれています。そしてアメリカ独自の民謡的賛美歌は、信仰復興運動の中で黒人霊歌の誕生に関わります。それは「深い河」のように、救いを求める黒人の魂の叫びを秘めた音楽ですが、クリスマスの曲は「山に登って告げなさい」のように喜びに満ちています。

### ○クリスマスの平和

クリスマスには、歴史上「休戦」という奇跡的な出来事がしばしば起こりました。日本のキリシタン時代（16世紀）、第一次世界大戦中のヨーロッパなど…。また日本の徳島の捕虜収容所では、ドイツ人捕虜によるオーケストラがクリスマスコンサートを行い、後に「第九交響曲」も初演しています（1918）。クリスマスの平和の歴史は、苦境の時こそ希望が力を持つことを教えて励まされます。

スペインのチェロ奏者カザルスは、フランコ政権の独裁に抗議して、国連の平和コンサートでカタルーニャのキャロル「鳥の歌」を演奏しました。鳥が幼子を歌い迎えるというかの地の生命賛歌です。ドビュッシーの歌曲「家無き子どもたちのクリスマス」は、戦争への怒りを子どもたちの悲痛な叫びに託して表現しています。そしてジョン・レノンとヨーコ・オノの「ハッピー・クリスマス」は、子どもたちが『戦争は終わった、クリスマスおめでとう！』と歌います。

クリスマスの音楽に包まれる時、芸術は人間性に根差していることを実感します。そしてそこに立ち帰って互いに分かち合いなさい、とクリスマスは私たちをいざなっています。

最後に、ウクライナのキャロルをご紹介します。「鐘のキャロル」は、クリスマスの喜びを鐘の音に乗せて高らかに歌います。『聴きなさい！あの鐘の響きを。すべての人々に喜びをもたらすクリスマスが来たと告げている。』